大陸と反逆：
宮崎滔天と石川三四郎のアナーキズム

山　﨑　好　裕*

はじめに

宮崎滔天は九州荒尾が生んだ中国辛亥革命の支持者であり、孫文との友情を育んだことで知られている。筆者は3年ほど前に、革命思想家としての滔天を北一輝と比較しながら論じたことがあった[1]。ただ、そのときに引用したのは滔天の最も読まれた著作『三十三年之夢』のみであったし、実践家としての滔天に言及しただけで彼の思想的内実については触れていなかった。正直、そのときは滔天にそれほどの思想的内実はないと思っていたし、今も彼がそれを意図して形成しようとしなかったという事実があると思っている。ただ、滔天は上記の著作以後も20年の人生を残しており、滔天の思想を思い描くにはその間の著作活動を見なければならないと思うようになったのである。そして、それはアナーキズム思想への滔天の距離の取り方を見ることで推し量ることができると考えている。

*福岡大学経済学部

1　山﨑好裕「近代日本政治経済思想における『中国』」福岡大学先端経済研究所ワーキングペーパー（http://www.econ.fukuoka-u.ac.jp/researchcenter/workingpapers/WP-2019-007.pdf）。

明治の幸徳秋水、大正の大杉栄に続く、昭和のアナーキズム思想家としてよく知られているのは石川三四郎である。石川は明治９（1876）年、埼玉県山王堂村に五十嵐九十郎の３男として生まれ、子のない老夫婦だけの石川家に養子として貰われた。生家は自由党の熱狂的な支持者であり、長兄の宰三郎と次兄の犬三は政敵改進党の連中に硫酸を浴びせる事件を起こし、長兄は服役もしている[2]。

石川は、現在の東洋大学である哲学館、および、中央大学の前身である東京法学院で学んだ後、内村鑑三や海老名弾正の影響の下、キリスト教に入信した。石川は万朝報社の社長秘書を務めて新進の思想に触れるとともに、平民社の人々との交流を通じてキリスト教社会主義者としての思想を固めていった[3]。

石川は、明治40（1907）年１月15日、堺利彦や幸徳秋水らと共に日刊『平民新聞』を創刊した。『平民新聞』は３月23日号に載せた論評が当局に咎められて、４月15日号をもって廃刊処分となる。編集人であった石川は４月25日に市ヶ谷の東京監獄に入れられ、その後、巣鴨監獄に移って１年余りを獄中で過ごした。このときに読んだクロポトキンの影響で、石川は社会主義者からアナーキストへと変貌を遂げていくのである[4]。

滔天は石川よりわずか６歳年上なだけである。彼らの生まれ育った家庭環境や、兄たちの過激な実践から強く影響を受けた点は、二人の共通する人格を形成する上で決定的な要因になったと思われる。さらに、多感な青年期にキリスト教に入信していることも共通点として注目に値するだろう。石川が獄中にあってアナーキストの道を歩み始める５年前に、革命運動の第一線から退くことを決めて浪曲師になった滔天が『三十三年之夢』の発表を始めて

---

[2] 辻野（1975）、83ページ。
[3] 同上、84-87ページ。
[4] 同上、110-115ページ。

いる。おそらくは時代の刻印を強く押された二人の思想を、本稿では大陸と反逆をキーワードに解明していく。

１．宮崎滔天における革命と反逆

明治35（1902）年３月、滔天は桃中軒雲右衛門を芝愛宕下町の寄席八方亭に訪ねて、浪曲師になるべく入門したいと申し出た。雲右衛門は赤穂義士伝が得意な演目で、この後、明治40年代に最盛期を迎える浪花節ブームの立役者となる人物である。師匠は半信半疑ながら、入門を認められた滔天は桃中軒牛右衛門の芸名を与えられ、10月１日と２日の両日、『三十三年之夢』の出版記念も兼ねた浪曲公演を神田錦輝館で行った[5]。

牛のように身体の大きな滔天の芸が、全く駄目であったことは有名な話だ。滔天の心臓は蚤のように小さいため、人前で話し始めた途端に、冷や汗が出てしどろもどろになるのである。自分を奮い立たせるために、滔天は只々大声でがなり立てたようだ。翌朝の読売新聞は「演説口調の割れ鐘の如き音声ハ繊弱なる三弦に和すべくもなく」と評された[6、7]。

九州に戻った滔天は師匠と袂を分かって、革命思想の普及を目的とした新浪花節を目指すことになった。この１作目として、滔天が佐世保で執筆した

5　榎本（2013）、128-141ページ。

6　同上、141-142ページ。

7　翌明治36（1903）年、桃中軒一座は滔天ゆかりの九州で巡業を行った。巡業は門司に始まり、荒尾、大牟田、博多、若松、佐賀、長崎、大村、佐世保と続いた。博多公演では筑前玄洋社が新聞で記事にしてくれ、師匠は馬に、自分は道化となって牛に跨って顔見世をしている。公演後に滔天は炭鉱王・伊藤伝右衛門から直接祝儀をもらって頭を下げているが、伝右衛門の後妻・柳原白蓮と息子・龍介が駆け落ち事件を起こすのはこの20年後である（同上、145-146ページ）。

のが「明治国姓爺」である。あらすじは、平戸の士族の家に生まれた主人公・堺鉄男が中国革命派の首領・孫霞亭と知り合い、世直しのために立ち上がるというものである。堺が滔天自身を、孫が孫文をモデルにしていることは言うまでもない。浪曲であるため、堺が孫の一人娘・玉蓮を守るために蜂起前夜に大立ち回りを演じたりもする。注目すべきは、堺がロシアのペテルブルクでアナーキスト団体・虚無党メンバーのフランス人医師たちと知り合い、彼らに共鳴して同志となる決意をする点である。滔天自身がアナーキズムに転向したかどうかは、十分な検討が必要であるが、強い関心を持ち、かなりの共感を示していたことは間違いないと言っていいだろう[8]。

この浪曲のなかで、滔天は堺、孫、玉蓮の 3 人に、中国革命後の政体について論じさせている。玉蓮は共和政こそ最高の政体だとし、その理由として、国家が人民の共同体である以上、政治は人民の申合せとして進められるべきだから、と述べている。徳望のある人間に人民総代を任せて、人民の意図を汲んだ政治を行わせるべきだと言うのである[9]。

娘のこの論に、父親の孫が反論する。父親は革命運動のリーダーとして、政治というものは道理ではなく方便に従って行われるべきだと言うのである。どんな国でも知者は少数でほとんどの国民は愚者である。だから、いくら道理と言っても、共和政ということで多くの国民の意見を政治に反映させると衆愚政治になってしまうというのだ[10]。

若いが故の理想論ということか、玉蓮も決して譲らない。君主制だと一時的に国家が強大になっても、結局利益は君主に属するので、国民はやがて抵抗し擾乱になってしまう。だが、共和政であれば、問題があっても話し合いによって解決されるので、擾乱が起きて国政が混乱することがないからむし

8　榎本前掲書、148-151ページ。

9　何（2016）、69ページ。

10　同上、70ページ。

ろ現実的であるとするのだ[11]。

堺はと言うと、国情の違いによるのだという折衷論である。易姓革命の伝統のある中国では、元々人民が中心の政体であるから、共和政はありうる選択肢かもしれない。だが、日本は万世一系の天皇が一貫して統治しており、人民もそれを支持しているから共和政は必要ないというのである。これは玄洋社などの国権論の立場であり、必ずしも滔天の思想とは言えない[12]。

最終的に、滔天は孫の口を借りて政体の歴史的発展説を開陳する。孫によれば、政治は次のような道筋で発展すると言う。まず、部族連合国家の酋長政治から始まり、君主専制の時代に進む。立憲政体というのが次に来るのだが、これは君主制と共和政の雑種政治とでも言うべきものだ。これが終わると真の共和政治の時代となるが、最後には歴史の到着点として無政府の世が来ると言うのである[13]。

ここでも、政治の終りとしての無政府状態が終着点として考えられていたことがわかる。だが、どうやらそれは現在追求されるべきものではなく、滔天にとっては遠い将来の話とされているようなのである。現在においては、共和政が比較的望ましい政体であると滔天は考えていたのであって、それは同時に孫文の考え方でもあった。

2．石川三四郎のアナーキズムとアジア

石川三四郎は獄中にいる間にまとめた文章を大正２（1913）年、『西洋社会運動史』という大著として出版した。だが、同書は直ぐに発禁処分となる。また、当時は大逆事件後の不穏な情勢が続いていて、幸徳秋水に近かった石

11　同上。
12　同上。
13　同上、71ページ。

川も身の危険を感じていただろう。彼はヨーロッパへの亡命を決意する。石川は伝手を頼ってポール・ルクリュ夫妻と知り合い、ブリュッセル、フランス・ドルトーニュ県ドム村、モロッコ・マラケシュなどの彼らの家に合計7年間滞在した。ポールの叔父エリゼ・ルクリュはフランスの地理学者であり、アナーキストとしても知られた人で、石川の著作にもその名が記されている[14]。

エリゼ・ルクリュ自身は1830年にフランスに生れたが、ルイ・ボナパルトのクーデターに反対して海外に亡命する。1857年に帰国すると海外での経験を元に地理学の著作を出版した。第1インターナショナルでは、社会主義者のマルクスやアナーキストのバクーニンと出会う。パリ・コンミューンに参加して逮捕され、亡命先のスイスでは地理学の主著を完成させる一方で、ロシアの有名なアナーキストのクロポトキンと協力関係を結んだ。1894年にブリュッセルの大学教授として招聘され、その地で1905年に没している[15]。

クロポトキンも著名な冒険家であり地理学者でもあったが、ルクリュにおいて地理学とアナーキズムの思想は分かち難く結び付いている。すなわち、人間と自然は一体のものであり、人間の生活は自然のなかでしか成り立ちえない。人為の制度である国家などは本来必要のないものであり、自然との一体性の自覚の下で自然の法則に従って生きることで、人間は完全な自由を手に入れることができるというのである[16]。

石川は大正9（1920）年にモロッコから帰国した。直後東京大学で土民生活に関する講演をし、文章に起こして日本社会主義同盟の機関誌『社会主義』に発表している。この主張は、フランスのルクリュ家で5年ほどの間、農業を実践して土に触れたことが元になっていた。大地に根差す土民の生活は、

14　野澤（2006）、840ページ。
15　同上、838ページ。
16　同上、839ページ。

他人に服従せず、かといって、他人を搾取することもなく、自由に他人と平等な協働関係を結びながら生きていくということだという[17]。

こうした石川独自のアナーキズム思想は、エリゼ・ルクリュの思想に深く影響されたものである。二人は共に、広大な自然のなかにあって個々の人間は極めて小さく無力なものであると考えていた。しかし、一人一人は弱々しい人間も、互いに支配服従の関係にならず、対等な権利で結びついて共同生活を営むことによって、その生命を全面的に開花できる。ただし、その連帯の意味と感じ方に二人の違いを見出すことができる。ルクリュの場合、弱々しい人間が連帯によって強くなり、自然を人間に都合の良いようにコントロールしていくことが進歩であるという、西洋的な発展史観を強く持っていたと言っていい。だが、石川の場合、弱々しい個々の人間というところから、東洋的な無常観を感じ取る面が強い。そして、世捨て人的な耽美的集団を作り、審美的な隠遁生活を営むことをよしとするようになり、徐々に政治的な活動からは距離を置いていくようになるのであった[18]。

3．滔天と石川のなかの革命家と文筆家

滔天と石川三四郎は一度だけ出会っている。いや、出会っているというのは不正確であって、石川が滔天を見ただけである。明治37（1904）年12月７日、石川は幸徳秋水や堺利彦たちと連れ立って両国常盤亭に出かけ、滔天一座の浪曲公演を聞いたのだ。公演はいつものように、滔天自作の「落花の歌」から始まった。「四民平等無我自由、万国共和の極楽を、斯世に作り建てなんと、心を砕きし甲斐もなく、計画破れて一場の、夢の名残の浪花武士、刀は捨てて張り扇、たたけば響く入相の、鐘に且つ散るさくら花。」石川はた

[17] 同上、841ページ。
[18] 同上、851ページ。

だ、次のように感想を書き残している。「芸は左程上手ではないが、彼が当年の意気を僅かに此浪花節に隠すかと思うて余は転た同情に堪えなかった。」[19]

浪曲師として革命実践から足を洗ったはずの滔天であったが、明治44（1911）年に中国で辛亥革命が勃発すると11月末になってから漸く上海に渡った。他方、孫文は武漢蜂起をコロラド州デンヴァーで聞くと、イギリスを経由して12月21日に香港に到着した。滔天は上海から香港まで出向いて、船上で孫文に再会している[20]。

私の上記の論文でも書いたが、北一輝は大正10（1921）年に『支那革命外史』を出版し、孫文の革命思想と、犬養毅や頭山満など、孫文の日本人支援者たちをまとめて批判している。まず、滔天を含む日本人支援者については、辛亥革命の実際の進展に何の貢献もしていないくせに、自分たちは革命の立役者だという幻想を抱き、滑稽な狂態を演じていると言う[21]。孫文の革命路線については、外国からの資金援助に頼って革命を遂行しようとしたことを、後世に禍根を残すものとして徹底的に筆誅を下した。革命はあくまでもその国民自身の手だけで成し遂げられなければならない。なぜならば、海外から援助を受ければ、必ずや後に外国の内政干渉を許すことになるからである。だから、孫文は中国にとって売国奴とでも言うべき者だと北は書いている[22]。

北の著作が出版された大正10（1921）年３月、滔天は萱野長知とともに孫文から広東に招かれた。これは滔天にとって最後の中国旅行となった。このころ、中国では民族主義が高まっていて、五四運動を契機に日本製品の不買運動が広まっていた。福州で滔天はこの実態を見てウンザリすると書いていることから、滔天が辛亥革命の現実とその後の中国社会に大きく幻滅してい

19　渡辺（1976）、197ページ。
20　同上、249ページ。
21　同上、256ページ。
22　同上、260ページ。

たことが窺えるのである。こうした政治運動からの乖離現象は、石川だけでなく滔天にも明瞭に見られるのであり、滔天の場合はそれが宗教への傾倒となって現れた。大正９（1920）年には、大本教の世直し思想に関心を持っていることがわかる文章を残している。自分より20歳若く、同じ熊本県出身の堀才吉が開いた大宇宙教には結構のめり込んだ。彼から古事記曼荼羅などの霊示現物を示されて、滔天は驚愕して素直に信じた。入信の背景は、滔天は、人類は無政府共産の状態に達しなければならないが、そのためには人間の動物的本能を克服する必要があり、そのためには国家を超越した人類本位の宗教が必要であると書いていることから推測できる。つまり、「明治国姓爺」の、あの思想が生きていたのである[23]。

滔天の中国行き、北の著作と正に同じ大正10（1921）年、石川はモロッコで書き溜めた原稿を『古事記神話の新研究』として出版した。同書は、日本民族の起源がメソポタミアにあって、その事実が古事記の記述によって論証できるという、荒唐無稽な内容を主張していた。天皇家の先祖がそこからやって来たという高天原は、チベット西北部のカチ高地であると言う[24]。ここに住んでいたカチ民族が天孫民族であることは、邇邇芸命の父である正勝吾勝勝速日天忍穂耳命の名に繰り返し現れるカチの音に示されている。このカチ族の一派が、世界で最初に鉄器を作ったヒツチト民族である[25]。石川はヒツチトの遺物に古事記の神話を思わせるものが多いことと、アッシリアの楔形文字文書に五七五七七の三十一音になっているものがあることを、その論証としてあげる[26]。

天孫降臨神話は、カチ民族が豊葦原瑞穂国であるメソポタミアに移動した

---

[23] 同上、316-322ページ。
[24] 石川（1950）、11ページ。
[25] 同上、８－９ページ。
[26] 同上、148-149ページ。

歴史的事実を表している。その途中、天孫を出迎えた猿田彦は、天狗面で示されるその風貌からカルデヤ人のことであり、それがサルダに訛ったのではないかと言う[27]。古事記に現れる国つ神は、メソポタミアの先住民であるスメル人のことであり、平野の民を意味する。これに対し、天つ神というのは、山岳の人を意味するアツカド人のことであろう[28]。国つ神の支配者・大国主命は、多くの妻を持つ点など、逸話に旧約聖書のアブラハムと似たところが多いので、同一人物と考えられるとする[29]。

比較神話学の専門家でも古代史学者でもない石川が、学問的に何の価値もないこの著作を書かねばならなかった理由は何であったろうか。エリゼ・ルクリュが、地理学は空間の歴史学であり、歴史学は時間の地理学であると言った、その言葉に触発されたということはあるかもしれない。だが、何よりも私は、古事記神話に代表される日本的特殊性を広いユーラシア大陸という世界に向けて開きたいという、石川の願望、あるいは、無意識の情熱があったのだと思う。太平洋戦争期に至る国粋的思想環境のなかで、古事記神話はこの狭い日本列島で展開された事実であり、その特殊性にこそ日本民族の価値があるという夜郎自大的な見方が国民に強制された。逆に、日本の世界的普遍性の側にこそ真の価値があるのだと、無政府主義者として国家を否定する石川は言いたかったのではないか。その証拠に、同書は単なるエキゾティズムだけでは説明できないほど版を重ねて読まれたのである。

27　同上、240-241ページ。
28　同上、247ページ。
29　同上、252-253ページ。

おわりに

宮崎滔天と石川三四郎に共通するものを、敢えて誤解を恐れずに言えば、反逆の思想ということであろう。彼らは家の思想によって、生まれ育ったときから反逆者であるべきことを運命づけられていた。彼らは常に権力に抵抗し、虐げられた者の立場に徹することを肝に銘じて生きた。

だが、明治、大正、昭和と日本の近代が進むにつれて、国内において反逆を試みる可能性は急激に無くなっていく。そのとき、彼らが反逆の幻想を託したのは、海外、さらに言えば、大陸というものであった。狭い島国を飛び出せば、無限の大陸が拡がり、政治的に未開の荒野が続いているように見える。二人は、それぞれ違ったかたちで、大陸での革命や反逆に貢献しようと試みた。

滔天にとっても石川にとっても、ある時期、大陸に新天地を求めることに成功した実感があったかもしれない。しかし、外国を知れば知るほど、そこには日本と同じく理想化できない陳腐な現実と醜い人間性もあるのだということが確実にわかってくる。希望は幻滅に変化していく。

肉体も精神も日本に回帰したとき、二人に見えてきたのは日本国内において世の中を変えていくしかないのだということと、その可能性だったと思う。人々が本当に幸せに生きるとはどういうことなのか。そのとき、国家には存在意義があるのか。滔天も石川も、それぞれ異なる形態でアナーキズムの思想を独自化していく。彼らの苦闘は、晩年の文章のなかに不器用な姿で断片的に記録されている。それをどう読み解き、どう生かしていくかは、21世紀の日本に生きる私たち自身に課された課題である。

参考文献

石川三四郎『増補改訂古事記神話の新研究』1950年、ジープ社。
榎本泰子『宮崎滔天―万国共和の極楽をこの世に―』ミネルヴァ日本評伝選、2013年、ミネルヴァ書房。
何鵬挙「革命から改良へ：宮崎滔天の夢と中国」『日本研究』第52巻、61-100ページ、2016年、国際日本文化研究センター。
辻野功「石川三四郎―海老名弾正との関連において―」『キリスト教社会問題研究』第23号、83-115ページ、1975年、同志社大学人文科学研究所キリスト教社会問題研究会。
野澤秀樹「石川三四郎におけるエリゼ・ルクリュの思想―その受容と差異―」『地理学評論』第79巻第14号、837-856ページ、日本地理学会。
渡辺京二『評伝宮崎滔天』1976年、大和書房。